

科目担当者氏名		科目
(ふりがな)	きど りえ 貴戸 理恵	卒業生 (メールアドレス)
連絡責任者氏名		科目設置機関
(ふりがな)	みうら こうきちろう 三浦 耕吉郎	関西学院大学 社会学部
授業科目名	科目認定番号	受講者数
社会調査実習 I	KSGa-090709-0	6名

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など；担当者が設定した「子ども・若者と社会とのつながり」という大まかな主題に基づいて、学生自身が主体となって具体的なテーマを絞り込み、研究計画を立て、調査を行い、成果報告を行った。学生たちは、既存の若者論(仕事・キャリアなどの就労論、いじめや少年犯罪などの逸脱論、若者の意識や実態に関する実証研究、メディアやオタクなどの文化論、教育における格差・不平等論など)を概観するなかで、「いわゆる“大人”によって語られる像」と「“若者”本人によって生きられる現実」がずれているのではないかという仮説を立て、テーマへと練り上げていった。調査者自身が「当事者」であるという特異な設定のもとでその利点と欠点への自覚を迫られつつ、不十分ながらも一連の調査過程を体験した一年となった。調査は全て学生の個人研究である。この概要報告書では調査を終えた4名の研究について報告する(残り2名は研究計画書段階に止まり、調査を開始するに至らなかった)。以下では、山村聖子による「規律意識の高い特殊な若者：剣道部員の観察を通して」について述べる。

II. 調査の企画・設計 (デザイン)

1. 調査のテーマ/領域：山村聖子による調査のテーマは、現代の若者の規範意識のあり方を質的調査から描くことである。いわゆる「若者バッシング」的な議論では、しばしば「規範意識の低い若者」という像が描かれるが、実際には規範意識の高い若者も存在する。彼ら・彼女らはいかなる現実を生きているのか、その意識の高さは何によって支えられているのかを調査した。
2. 調査の内容/概要：「規範意識が高い」と自認しており周囲の評判も高いある高校の剣道部の生徒たちに対して、参与観察・インタビュー・アンケートを行い、練習への参加態度、顧問教師との関係、先輩・後輩関係、部活と勉強の両立のあり方などを調べた。
3. 調査の範囲/対象(量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入)：「規範意識が高い」と自認しており周囲の評判も高いある高校の剣道部の生徒たちに対して、参与観察・インタビュー・アンケートを行い、練習への参加態度、顧問教師との関係、先輩・後輩関係、部活と勉強の両立のあり方などを調べた。
4. 主な調査項目：主として、①「規範意識が高い」とされる剣道部の練習風景とはいかなるものか、②部員たちは自らの意識の高さをどのように認識しているか、③同級生、先輩-後輩、顧問教師との関係はどのようなものか、という点を、①は参与観察、②③はインタビュー・アンケートを通じて調査した。

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集(現地調査)の方法：限定された対象から質の高い情報を多角的に収集するため、複数の方法を必要に応じて組み合わせる「トライアングレーション」の手法をとった。第一に、対象がいかなる日常を生活しているかを調べるため部活動の参与観察を行った。第二に、そうした日常に当事者がいかなる意味付けをしているかを調べるためアンケートを実施した。さらに、より具体的な情報を得るため、協力してくれた部長を含む2名の生徒に対してインタビューを行った。
6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：調査期間は2009年8月、調査地は三重県の高校、調査員数は1名である。
7. 収集したデータの量と質への評価(量的調査の場合は有効回収票数及び回収率を必ず記入)：データの量・質は、一定の水準を満たしたものの課題を残すものであった。参与観察ではフィールドノートや写真を活用し対象のリアリティにある程度迫りえた一方で、アンケートやインタビューの成果は当事者の意味付けを十分に明らかにできるものではなく、対象を再検討して次年度に引き継がれることになった。

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析/解釈の方法：KJ法によりデータ分析を行った。フィールドノート、アンケート、インタビューで得た質的データをテーマ別に分類したうえで、個々のテーマ内の情報をユニット化し、KJ法に従って再文脈化した。模造紙にまとめた結果は、解釈が妥当であるかどうかを、担当者の指導のもとで学生同士で検討した。
9. 調査の成果(調査から得られた主な知見など)：剣道部の生徒たちは、「現代の若者は規範意識が低い」という通念とは異なり、規律正しい生活態度、部活と勉強への真面目な取り組み、学校内の上下関係の尊重など「規範意識が高い」とされる側面を多く備えていた。その背景には、同じ価値を共有する「部活の仲間」の存在、コミットメントが大きい部活顧問、剣道という「礼儀を重んじる」スポーツに対する理解など、意識の高さを支える条件があった。これらの条件がない場所、たとえばホームクラスなどでは、剣道部の生徒たちは、周囲の生徒がさぼっていても「浮く」ことを懸念して特に注意をしないなど、葛藤的な態度を取ることがあった。
10. 報告書刊行の予定と概要：不足点・課題点を次年度に引き継ぎ、調査・分析の厚みを増したうえで、報告書としてまとめることを目指している。

科目担当者氏名		科目担
(ふりがな)	きど りえ 貴戸 理恵	
連絡責任者氏名		科目設置機関名
(ふりがな)	みうら こうきちろう 三浦 耕吉郎	関西学院大学 社会学部
授業科目名	科目認定番号	受講者数
社会調査実習 I	KSGa-090709-0	6名

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：学生の役割、全体的な感想については、「1/2」と同様である。以下では、福岡典子による「オタク女子の実態：なぜ隠すのか？」について述べる。

II. 調査の企画・設計 (デザイン)

1. 調査のテーマ/領域：福岡典子による調査のテーマは、「オタク」という存在をジェンダーの観点から探求することである。「オタク」という語は主として男性を示す語として流通してきたが、近年では「婦女子」など女性を指す近接の語も流通している。この調査では「オタク女子であること」が「当事者」としていかなる意味を持つかを明らかにする。
2. 調査の内容/概要：「オタクであると自認しながらそのことを周囲に隠す女性」(＝「隠れオタク女子」)に対してインタビューを行い、「オタクである自己」と「女性である自己」がいかなる葛藤を孕んでいるか、「オタクであること」を隠すように当事者に迫るジェンダー規範とはいかなるものかを調査した。
3. 調査の範囲/対象 (量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入)：対象となったのは、「隠れオタク女子」である10代後半～20代の女性3名である。「オタクであることを隠す」という現象に着目することにより、「異性から性的存在としてまなざされること」が男性よりも重視される女性というジェンダーに固有のオタク経験を明らかにできると考えた。
4. 主な調査項目：いつ・どのように「オタク」になったか、どのような場面でいかに「オタク」であることを明らかにしている/隠しているのか、「女性である自己」と「オタクである自己」をどのように両立させているのか、ジェンダー・セクシュアリティについていかなるイメージを持っているか、など。

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集 (現地調査) の方法：調査方法は、大まかな共通調査項目を設けたうえで、情報提供者にオープンエンドで自由に語ってもらう半構造化面接である。インターネット上のコミュニティで対象者を募り、調査概要を示したうえで協力をあおぎ、実際に会って一人当たり1時間ほどインタビューを行いテープに録音した。
6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：調査時期は2009年8月～2010年1月、調査地は兵庫県、調査員の数は1名
7. 収集したデータの量と質への評価 (量的調査の場合は有効回収票数及び回収率を必ず記入)：調査計画は独創的だったが、実際に収集したデータは質量ともに課題を残すものだった。とはいえジェンダー・セクシュアリティは一般的に語りにくいテーマであり難度は高い。それでも、調査者自身が「隠れオタク女子」であり当事者としてインタビューしたことで対象のリアリティに迫れた部分はある。今後は調査スキルを上げより時間をかけることで改善を望みたい。

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析/解釈の方法：KJ法によりデータ分析を行った。インタビューは原則としてベタ起こしはせず、単一の情報ごとに文章に起こしたうえで、必要な箇所のみ逐語で起こした。担当者は①情報提供者ごとにケースレポートを作成したうえで、②テーマ別に分析を行うよう指導したが、テーマ別分析のみに止まった。
9. 調査の成果 (調査から得られた主な知見など)：調査者は「オタクであること」と「女性であること」は葛藤的なことでありオタクである自己を隠すのは男性の視線を意識するためである、とする仮説を持っていたが、実際の語りでは「男性より趣味の方が大事」とされるなど、「女性」と「オタク」のアイデンティティ葛藤はさほど存在していなかった。彼女たちがオタクであることを隠すのは、「世間一般でオタクの地位が低い」「学校などのピアグループで浮かないため」であり、ジェンダー・セクシュアリティの関与は直接的ではないことが分かった。
10. 報告書刊行の予定と概要：不足点・課題点を次年度に引き継ぎ、調査・分析の厚みを増したうえで、報告書としてまとめることを目指している。

<記入上の注意点> 1. 調査のテーマ毎に用紙を替えて(3つのテーマを立てて実施した場合は合計3枚に渡って)ご記入下さい。

2. 最上部の*印の箇所には数字を(*/*)には、報告書が複数枚になる場合のみ、3枚中の1枚目なら1/3とご記入下さい。

3. 全ての項目について具体的にご記入下さい。但し、1テーマ毎に印刷が必ずA4サイズ1枚に収まるようにして下さい。フォントサイズは変えず(設定してある通りにして)、項目毎に分量に応じて「行の高さ」を変えることで調整していただけましたら幸いです。

4. 報告書はウェブ上で公開する予定です。また、調査実習情報をDB化することも検討しています。ご承知置きの上、ご記入下さい。

科目担当者氏名		科目
(ふりがな)	きど りえ 貴戸 理恵	
連絡責任者氏名		科目設置機関
(ふりがな)	みうら こうきちろう 三浦 耕吉郎	関西学院大学 社会学部
授業科目名	科目認定番号	受講者数
社会調査実習 I	KSGa-090709-0	6名

I. 調査実習に関するコメント
学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：学生の役割、全体的な感想については、「1/4」と同様である。以下では、川部真稔による「自殺志願者の主張：彼らは何を求め、何を捨て去るのか」について述べる。
II. 調査の企画・設計 (デザイン)
1. 調査のテーマ/領域：この調査のテーマは、いわゆる「自殺志願者」が「死」および「生」についていかなるイメージを持っており、どのように「自殺」を志願しているかを、「当事者」の視点から明らかにすることである。
2. 調査の内容/概要：インターネット上の「自殺を否定しない」ことを参加条件とする「自殺志願者」が集うコミュニティに参加し、インターネット上のアンケートを通じて参加者の意識を探った。
3. 調査の範囲/対象 (量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入)：対象となったのは、mixiにおける「自殺を否定しない」ことを参加条件とするコミュニティである。「自殺」という困難なトピックについて情報提供者にアクセスし、証言を得るうえで、対面式のインタビューよりインターネットを利用する調査方法が現実的であった。また、当コミュニティを選択したのは、管理が行き届いており「荒らし」が少なく、内容ある議論が行われていたためである。
4. 主な調査項目：「自殺志願者」にとっての「生」とは何か、「死」とは何か、その両者に違いはあるか、あるとすればどの点が違っているか、またそう考える理由は何かを尋ねた。
III. データ収集の方法と結果
5. データ収集 (現地調査) の方法：調査方法は、インターネット上でのアンケート調査である。対象となったコミュニティ全体に宛ててアンケートを実施し、51の回答から使用不能なものを除いた25の回答を分析対象とした。
6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：調査時期は2009年8月～2010年1月、調査地は兵庫県、調査員の数は1名である。
7. 収集したデータの量と質への評価 (量的調査の場合は有効回収票数及び回収率を必ず記入)：調査計画は独創的だったが、実際に収集したデータは質量ともに課題を残すものだった。調査項目がやや抽象的すぎ、得られた回答は漠然とした内容が多く分析が困難であった。しかし、「自殺」という語りにくいトピックに言及する一次資料を一定量得られたことはねらい通りだった。
IV. データ分析の方法と結果
8. データ分析/解釈の方法：25のデータそれぞれについて調査者が死生観を解釈し、その内容に即して分類した。
9. 調査の成果 (調査から得られた主な知見など)：自殺志願の気持ちや死生観など、通常の社会生活においては語られにくいテーマが、対象となったインターネット上のコミュニティでは豊富に語られていた。そこでは「死」への憧れはもはや「表わしてはならないもの」という制約を持たず、コミュニティ上で語りあうことである種のリアリティを獲得していた。
10. 報告書刊行の予定と概要：不足点・課題点を次年度に引き継ぎ、調査・分析の厚みを増したうえで、報告書としてまとめることを目指している。

- <記入上の注意点>
1. 調査のテーマ毎に用紙を替えて(3つのテーマを立てて実施した場合は合計3枚に渡って)ご記入下さい。
 2. 最上部の*印の箇所には数字を(*/*)には、報告書が複数枚になる場合のみ、3枚中の1枚目なら1/3とご記入下さい。
 3. 全ての項目について具体的にご記入下さい。但し、1テーマ毎に印刷が必ずA4サイズ1枚に収まるようにして下さい。フォントサイズは変えず(設定してある通りにして)、項目毎に分量に応じて「行の高さ」を変えることで調整していただけたら幸いです。
 4. 報告書はウェブ上で公開する予定です。また、調査実習情報をDB化することも検討しています。ご承知置きの上、ご記入下さい。

2009年度開講科目

調査実習概要報告書

4/4

2010年4月16日

科目担当者氏名		科目名
(ふりがな)	きど りえ 貴戸 理恵	
連絡責任者氏名		科目設置機関名
(ふりがな)	みうら こうきちろう 三浦 耕吉郎	関西学院大学 社会学部
授業科目名	科目認定番号	受講者数
社会調査実習 I	KSGa-090709-0	6名

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：学生の役割、全体的な感想については、「1/2」と同様である。以下では、朴ジュンヒョンによる「受験戦争：長き苦勞の果てに」について述べる。

II. 調査の企画・設計 (デザイン)

1. 調査のテーマ/領域：この調査のテーマは、「受験戦争が激しい」とされる韓国社会において、大学受験を控えた人びとが、何を求め、いかなる思いで受験に臨んでいるかを調べるものである。
2. 調査の内容/概要：韓国で大学受験に臨む受験生にインタビューを行い、受験しようと思ったきっかけと、大学入学にこだわる理由を尋ねた。
3. 調査の範囲/対象（量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入）：対象となったのは、高校生（18歳女性）と浪人生（21歳男性）の2名である。調査者は韓国からの留学生であり、現地での人脈からアクセス可能性のある対象者を選んだ。
4. 主な調査項目：共通調査項目は①大学受験をしようと思ったきっかけ、②大学入学にこだわる理由の2点であり、後はオープンエンドで自由に語ってもらった。

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集（現地調査）の方法：調査方法は、大まかな共通調査項目を設けたうえで、情報提供者にオープンエンドで自由に語ってもらう半構造化面接である。実際に会って一人当たり1時間半ほどインタビューを行いテープに録音した。
6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：調査時期は2009年8月、調査地は韓国ソウル、調査員の数は1名である。
7. 収集したデータの量と質への評価（量的調査の場合は有効回収票数及び回収率を必ず記入）：調査地の地理的な遠さと時間の制約上、主題と調査項目を練り上げ切らないまま調査に入ったため、得られたデータは不十分である。一方で、データには韓国の若者の受験に対するリアリティが部分的に良く現れており、今後の追加調査と分析によってはより掘り下げた発見に到達しうると思われる。

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析/解釈の方法：インタビューデータを提示し、それに対する調査者の解釈を述べた。データと分析に説得的な連関性を提示するに至っていない。
9. 調査の成果（調査から得られた主な知見など）：「韓国社会に固有の縁故主義と学歴主義の併存が、受験熱を高め、受験生にとって重圧となっている」と調査者は結論付ける。主題において示した「当事者」のリアリティは、インタビューデータには部分的に現れているものの、結論で活かされていない。
10. 報告書刊行の予定と概要：不足点・課題点を次年度に引き継ぎ、調査・分析の厚みを増したうえで、報告書としてまとめることを目指している。

- <記入上の注意点>
1. 調査のテーマ毎に用紙を替えて(3つのテーマを立てて実施した場合は合計3枚に渡って)ご記入下さい。
 2. 最上部的*印の箇所には数字を(*/*)には、報告書が複数枚になる場合のみ、3枚中の1枚目なら1/3とご記入下さい。
 3. 全ての項目について具体的にご記入下さい。但し、1テーマ毎に印刷が必ずA4サイズ1枚に収まるようにして下さい。フォントサイズは変えず(設定してある通りにして)、項目毎に分量に応じて「行の高さ」を変えることで調整していただけましたら幸いです。
 4. 報告書はウェブ上で公開する予定です。また、調査実習情報をDB化することも検討しています。ご承知置きの上、ご記入下さい。